



## F. カフカの中期作品の解明 - 『判決』から短編集『田舎医者』を中心に - [論文要旨及び審査の要旨]

著者	奥田 誠司
発行年	2013-09-19
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416乙第464号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/9355">http://hdl.handle.net/10112/9355</a>

[ 8 ]

氏 名	奥 田 誠 司
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学 位 記 番 号	博第 464 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 25 年 9 月 19 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	F.カフカの中期作品の解明 —『判決』から短編集『田舎医者』を中心に—
論 文 審 査 委 員	主査 教授 宇佐美幸彦 副査 教授 川神 傳弘 副査 教授 芝田 豊彦

## 論 文 内 容 の 要 旨

奥田氏の論文は、1912年から1917年の間に執筆されたカフカ中期の作品を取り上げ、その内容を詳しく検討したものである。ここで論じられている作品は、『判決』、「ある戦いの記録」、『失踪者(アメリカ)』、『変身』、『審判』、短編集『田舎医者』である。カフカ自身はほとんど無名のまま、1924年に結核のため若くして病死したのであるが、ヒトラー時代にはユダヤ人であったことから、その作品はドイツではまったく読まれず、第二次世界大戦後によりやうく世界的に評価されるようになり、その後は全集や書簡、解説書、研究書が多数出版されるようになった。現在は、カフカに関しては、宗教的・神学的解釈、精神分析的解釈、歴史的解釈、伝記的解釈など多様な研究がなされているが、奥田氏の論文は、作品には作者の生の姿が投影されているという立場から、手紙や日記を丹念に調査し、作者の創作時点での心境や創作動機を明らかにしたものである。

奥田氏の論文は、カフカの伝記の中でも1912年という年に注目している。この年にカフカは『判決』を執筆したのであるが、奥田氏は、「東方ユダヤ人のイディッシュ演劇体験とフェリスとの邂逅に基づいて成立した『判決』によって、カフカははじめて自己の文学的可能性を発見し、作家としての自己意識に目覚めたのであり、この年は文字通り、彼にとって決定的な転換点となった」と指摘する。『判決』から2カ月後に書き始められた『変身』では、『判決』とは対照的に、実際に実現しないがゆえの共同体への憧憬が描写されている。『変身』は3章で構成されているが、グレーゴルは『田舎の婚礼準備』のラバーンとは異なり、各章の最後の場面で自分の部屋を去り、家族の領域である居間に這い出そうとする。この行為の背後には、家族との繋がりを回復し、既に『変身』以前に始まった孤立化を打ち破りたいという願望が潜んでいると、奥田氏は述べ、「この書くために必要な孤独への内的志向と、共同体に対するやむことのない憧れとが、それ以後のカフカの作品を貫く重要なライトモチーフを形成していく」と論じている。

奥田氏は、『判決』における「ロシアの友人」の代理人として登場する父親のもつ太股の傷痕、『変身』でのグレーゴルが父親の投げた林檎によって受ける傷、『田舎医者』の少年の脇腹にある薔薇色(ローザ)の傷を取り上げ、これらの傷が「確固たる生の拠り所を

奪われ、決して自己確証され得ないというカフカの存在の『不安』を象徴的に示している」と指摘して、「彼（カフカ）の悲劇は、自己の内部存在の深淵との分裂性並びに他者との間に血の通うルートも断たれてしまっていることである。換言すれば、カフカは自己に対しても他者に対しても二重の意味において根源的な関係性を喪失しているのである」と述べている。

短編集『田舎医者』の最後に置かれている『アカデミーへの報告』（1917年）においては、かつて猿であった主人公ロートペーターには、自らの猿猴的根源への帰還の可能性は完全に閉ざされている。この点を踏まえて奥田氏は、「ロートペーターが陥っている『出口』のない残酷極まる状況は、1914年末、『審判』の執筆を放棄したカフカ自身の姿に照応する」と述べる。この作品の出口のなさを奥田氏は、作者自身の人生の上での問題と結び付ける。つまり当時カフカが、もう一つの「出口」ともいえるフェリスとの関係も婚約破棄により中断し、まさに「出口」のない八方塞がりの迷路へと追い込まれていたことが指摘されている。

## 論文審査結果の要旨

奥田論文は、カフカの作品と伝記的な背景に関する詳しい調査研究を基礎にしている。また主としてドイツにおけるカフカ研究書を先行研究として網羅的に参照し、きわめて実証的に作品論、作家論を構築している。カフカの作家論、全体的な注釈書として、Beck, Evelyn Torton: *Kafka and the Yiddish Theater*; Beicken, Peter U.: *Franz Kafka*; Bezzel, Cris: *Kafka-Chronik*; Binder, Hartmut: *Kafka Kommentar*; Canetti, Elias: *Der andere Prozeß*; Emrich, Wilhelm, *Franz Kafka*; Haymann, Ronald: *Kafka. Sein Leben, seine Welt, sein Werk*; Kurz, Gerhard, *Der junge Kafka*; Pawel, Ernst: *Das Leben Franz Kafkas*; Politzer, Heinz: *Franz Kafka*; Rajec, Elisabeth M.: *Namen und ihre Bedeutungen im Werke Franz Kafkas*; Sokel, Walter H.: *Franz Kafka*; Stach, Reiner: *Kafka*; Unseld, Joachim: *Franz Kafka. Ein Schriftstellerleben* など、の重要な研究書を踏まえ、またそれぞれの個別の作品についての解釈についても、ドイツや日本での研究書をきめ細かく調査し、その成果を踏まえて、この論文の参考としている。

当然のことながら、カフカの作品（原稿）と手紙や日記といった作者が執筆した第一次的な資料に非常に丹念にあたっていることが、論文から明らかになる。カフカは夭逝したこともあり、生前に刊行された作品は比較的少なく、多くの作品は未発表のまま原稿で残された。友人のマックス・ブロートがその遺稿をつなぎ合わせ、カフカ全集（初版 1935年、第2版 1946年）として刊行した。日本で戦後よく読まれているのは、このブロート編集全集の翻訳であるが、ブロートの編集に対しては、恣意的ではないかという異論も少なからずあった。そのブロートの死後、カフカの原稿は「解禁」となり、1982年からは『批判版カフカ全集』が、また最近では『史的批判版カフカ全集』（歴史校訂版、1997年から）が刊行されている。こうした新しい版にも奥田氏は目を通し、それぞれの異同についても論文の中で具体的な指摘がなされている。

この論文は作品そのものと作者との関係を実証的に明らかにする伝記的研究である。とくに 1912年から 1917年の間の伝記的な重要事項として、家族（とりわけ父親）との関係、

作家としての執筆活動と市民的日常生活、婚約とその破棄などが本論文では注目され、それぞれの作品の中に、作家の葛藤が単純な形ではなく、いくつかの要素が絡み合いながら、多様な形で反映されていることが明らかにされた。これによってカフカ作品の異様な展開の謎が作家の側の立場からの資料によって本質的に明らかにされていると言えよう。

なお公聴会の審査の過程では、「恥辱感」と「罪悪感」についてユダヤ人カフカがどのような宗教的考えを持っていたかなど、いくつかの質問が提出されたが、これらについては今後の奥田氏の研究に期待することになった。しかし審査委員は全員、奥田氏のカフカ作品に対する深い理解を高く評価し、カフカの作家としての立場を明らかにしたこの論文が日本におけるカフカ研究の発展に貢献するものであると判断した。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。